

日本のキリスト教と大学紛争

その文脈・過程・帰結

齋藤崇徳(東京大学大学院)

研究発表Ⅱ

本発表の目的は、大学紛争期におけるキリスト教系大学批判・キリスト教批判にたいし、諸キリスト教系大学がどのように「適応」していったのかを、その経過を整理しながら明らかにすることにある。

当時においても、また回顧的な文書においても、キリスト教系大学における大学紛争はとりわけ深刻なものであり、とくにそこではキリスト教が「批判」されていたと言われることが多い。例えば、当時東京神学大学の教員であった大木英夫が「大学紛争のなかで、いちばん紛争の猛火に襲われたのは、キリスト教関係の大学」であったと回顧しているように、当時のキリスト教系大学は、「根本的な仕方で」、「キリスト教主義大学の存在理由は何か」が問われていたという(大木英夫 1987「教育の神学」学校伝道研究会編『教育の神学』ヨルダン社, p.13)。では、その「批判」はどのように生起し、どのような内容を持ち、諸キリスト教系大学はこれにどのように対応したのだろうか。

この批判に大学がどのように応答したのかということを考える際に、本発表では、これを思想的、あるいは社会意識的に捉えるのではなく、批判に大学一個の組織体としてどのように適応したのかを実態的に明らかにする。Gumport が述べるように、大学組織は一般に社会変動の際にその外的なもの(external forces)への対応を迫られる(Patricia J. Gumport, 2007, "Sociology of Higher Education: An Evolving Field." Gumport ed. *Sociology of Higher Education: Contributions and Their Contexts*. The Johns Hopkins U.P., pp.17-50)。ただし、これは単に「適応」する、つまり大学の外的な環境が要請するもの、あるいは必要とするものを完全に組織体の内に取り入れ実現するというよりは、その環境との相互作用を行うことを通じて、自らを変容させていくと考える方が、歴史的にも妥当な理論だと考えられる。本発表では、この意味での「適応」を大

学紛争期のキリスト教系大学の事例に見出す。これによって、社会変動と大学という一般的な主題および、戦後日本におけるキリスト教と大学の在り方について考える材料としたい。

紛争期におけるキリスト教系大学批判・キリスト教批判は、これまでの研究においては、個別の研究者が回顧的に述べたり、あるいは個別の学校史、教会史において部分的に触れられることはあったものの、全体としては研究の対象とはなってこなかった。例えば小熊は大学紛争期の全体像を描いてはいるものの、キリスト教系大学におけるそれについてはあまり触れておらず、また、批判の議論の内容についても検討していない(小熊英二 2009『1968(上): 若者たちの叛乱とその背景』新曜社; 同 2009『1968(下): 叛乱の終焉とその遺産』新曜社)。また、赤江は 60・70 年代当時のキリスト教批判を吉本隆明、田川建三、柄谷行人の議論から分析しているが、それは思想的な面に関するものに留まっており、キリスト教批判が実際に大学にたいしてどのような影響を与えたのかについては十分に明らかにしていない(赤江達也 2005「宗教／批判の系譜: 吉本隆明・田川建三・柄谷行人」北田暁大他編『カルチュラル・ポリティクス 1960／70』せりか書房, pp.68-90)。本発表では、キリスト教系大学独自の紛争の在り方を主に各学校史、教会史の資料から実証的に明らかにする。

このような視点を置きながら、本発表では諸大学の「適応」を、文脈、過程、帰結の三つの位相で捉え、かつ各位相における類型を提示する。文脈とは、キリスト教系大学・キリスト教批判が置かれていた歴史的な位置であり、過程とは学生たちがどのようにそれら批判を行ったのか、そして帰結はその結果どのようなことが大学組織に起こったのかを示す。これにより、紛争・批判の社会環境を確認しながら、学生による批判の内容と組織に起こっ

た変動を捉える。ただし、諸キリスト教系大学における紛争の在り方は同一であったわけではなく、その経過は基本的には個別的であった。そのため、本発表では、それら位相における類型をそれぞれ作成することによって、分析の方法とする。ただし、以下に提示される類型は、互いに相互排他的であるとは限らず、一つの大学において複数の類型にまたがる事態が生起した。

まず、文脈としては、大衆化、世俗化、学生運動という三つの類型を提示する。大学紛争の背景に「大衆化」があったことは基本的に了承されているが、キリスト教系学校において特徴的であったことは、それが「世俗化」という状況と組み合わせられていたということである。すなわち、定員・実員が増加し、また多様な層が高等教育に流入してくるようになったことにより、キリスト者の学生の割合が減少し、また、大学は非キリスト教的である「一般社会」全体に適應しなくてはならなくなり、理念的にもキリスト教主義を保つことが難しくなった、あるいは多元主義化したと考えられる。また、学生運動という文脈も重要である。なぜなら、キリスト教系学校批判・キリスト教批判は、当時の学生運動におけるレトリックを模倣することによって成り立っていたからである。とくに「全共闘」という形態の出現以降、大学紛争は連鎖していったが、そのとき、運動の行動の方法（バリ封、大衆団交など）のみならず、レトリックやそこで使用される概念も模倣されていた。キリスト教系学校批判・キリスト教批判はその内容は確かにキリスト教に関するものであったが、例えば「戦後民主主義」の部分に「キリスト教」を単に当てはめたり、あるいは「主体」や「否定」などの言葉を使ったりしたものでもあった。

次に、過程について、学校批判と教会批判という類型から議論する。ただし、キリスト教系学校批判・キリスト教批判をみる際には、前提として、第一に、全てのキリスト教系大学において紛争が起こったわけではないということ、第二に、キリスト教系大学特有の運動の形式があったわけではないということ、第三に、キリスト教系大学だからとはいえ常に全ての学校でキリスト教に関連するものが批判されていたわけではないということを確認しておく必要がある。第一の類型である学校批判は、主にキリスト教と大学とが結びついていることにたいする批判であった。その内容は上述のように当時の学生運動のレトリックの模倣に基づく部分もあっ

たものの、「建学の精神」への批判、礼拝などのキリスト教的な行事への批判、「学生の自治」におけるキリスト教的なものの排除、「信教の自由」という主張などが述べられた。他方、教会批判は主に独自の行動をとり集団をつくっていたキリスト者の学生によって、学校と教会とを同様の批判されるべきものとして考えることにより主張されたが、学生たちがそのように主張したのは神学部などの学校のキリスト教的部分が教会に連なっていたからであった。彼らは必ずしもキリスト教的なものに否定的ではなかったが、しかし、学校は「キリスト教的に」批判された。

最後に、その帰結について、四つの類型を提示する。第一に、「真の」キリスト教系大学なるものが提示された。これは大学のキリスト教的部分への批判を受けたことによる、学生運動のレトリックを部分的に模倣しながらの、大学のキリスト教性の保持・改訂として位置づけられる。これは、当時一般に議論されていた「あるべき大学像」・「真の大学」の一変種でありながら、批判を「真の」キリスト教系大学の定立というかたちで受け止めることであった。そこでは、例えば「真の」キリスト教は「産学協同」と相容れないなどという主張がなされた。第二に、大学紛争は教会紛争に結びつくこともあった。これはとくに教会との関係が深い大学において起こったが、上述の教会批判が教会内部の対立と結びつき、大学と教会との関係性の見直しがなされた。そこでは、アクターの配置によって、大学と教会が再結合することもあれば、逆にそれらに対立することもあった。第三に、大学組織の「世俗化」が起こった。つまり、キリスト教批判をそのまま受け止め、大学におけるキリスト教性の減少、組織の改編が行われた。これは礼拝の廃止、寄附行為の改訂、カリキュラムの変化、クリスチャンコードの見直しなどによってなされた。第四に、第三の類型を極端にしたものであるとも言えるが、神学部・神学科の廃止が行われた。この原因としてはむしろ学生たちの批判も背景にあったのだが、直接的には学校内部すなわち、法人・教学組織間・教授間の政治によって起こったことであった。

キリスト教系大学にて起こった紛争は以上のような位相・類型によって捉えられるが、最後に、その日本の特徴を非キリスト教的社会におけるキリスト教系大学、および被宣教地における教会という面から捉え、結論とする。